

見る可からず、これ此方向を保ちて沙陀を出て、西北行して一驛を經、魚兒樂に至るとなすも、魚兒泊の位置は撫州昌州よりさまに東北にあたり、こゝより北行しては泊に出づる能はされはなり、されは沙漠中をも大體に於て東北の方向をとりしものと認むべく、實に長春真人は此地より東北行せしことを云へり、魚兒泊は金史地理志に『柔遠縣有大魚樂』といふものにして、元史太祖本紀に魚兒樂といひ、同史特薛禪傳に答兒海子と云ひて、上都の東北三百里と記せり、プルツェワルスキイ Przewalsky 等の親しく踏査したる地にして、東經百十七度、北緯四十三度に位し、今蒙古に Taal-nor と稱するものなり (Dalai-nor とも記るさることあれと誤れりとはブレットシュナイデル Bretschneider の云ふ處なり) Taal-nor よりはまた沙漠を斷ちて窟速吾即ち黒山に出でたるものにして、黒山はパラヂウスの言へるか如く今の Tono 山に外ならざるへし、これ德輝記載の光景とパラヂウスの目撃せる地形とか、仍細に相合するを見ても知るを得へし、されは德輝の横斷せし沙漠中の道は、大體に於て西西北の方向を取りしものにして、彼か自泊之西北行と云へるのみにては、頗ふる解釋に苦しむ所なれとも、上述の理由よりして之を信せざる可からず、此黒山の地よりしては翁陸連即ち Kerulen 河に沿ひて渾獨刺に出でぬ、渾は hun にして蒙語に濁れる意味を云ひ、獨刺は即ち今の Tola 河なり、此河に沿ひて之か北に迂回する地より西北行四驛にして吾悞竭腦兒即ち Ugeinor に出でたり、此地より彼は西行したるか、和林に入るには茲に道を分つべく、相去ること(南に)百餘里なりといへり、以上は即ち蒙古の招きに應じて、張德輝か支那より北向したる道筋にしてこゝに窩濶台時代に設けたる驛路なりと云はんとする所なり、之を長春の行路と比するに、魚兒樂即ち Taal-nor に至るの間は殆んど全たく之に合するを知る、只張德輝は桑乾河の上流に沿ひて北行し『由橋而西、乃德興府道也、